

付編 名里橋について

1. はじめに

名里橋は日田盆地東部の求来里地区から有田地区を潤す求来里川の上流、大字求来里字名里にある石造アーチ橋で、県道戸畑日田線（旧佐賀街道）から分岐する市道求来里中央線の一部となっている。現存・流失・撤去等合わせて700基近くもの石橋（桁橋を含む）を有し、その数日本一とも言われる大分県内において、現在日田市では20基の石橋が確認されており、名里橋はそのひとつである。

地元住民の生活道路として現役を勤めるこの橋は、今回求来里川河川改修と市道求来里中央線改良の各事業実施に伴い架替えが必要になったことから、その構造について記録に残し、解体を行ったものである。なお解体後の石材は、求町の公園内に保管されている。

2. 記録保存にいたる経過

日田盆地東部の農村地帯の主水源である求来里川は、普段の水量はさほど多くないものの川幅が狭く、また幅狭い谷を激しく蛇行しながら西流するため、流域は降雨により発生する度々の洪水に悩まされていた。最近では平成13年7月に、水田や道路の冠水・住宅の浸水など、甚大な災害を引き起こしている。

この求来里川下流域の有田地区では、平成8年度から大分県が事業主体となる大規模な圃場整備が実施され、同時施工の河川改修や道路整備により、それまでの景観をまるごと変えるような大改造が行われた。その開発の波は中～上流域の求来里地区にも及ぶこととなり、地元と県・市の事業主体および文化財担当部局で円滑な事業実施に向けて協議を行ってきた。

そんな中、石積み断面が小さく大雨が降ると石橋により水がせき止められるため洪水の元凶と考えられてきた名里橋が今回の大改造に伴い撤去されることを知った地元住民の間では、70年余りにわたって地域の生活を支えてきた愛着のある石橋とその景観の保存を求める声が上がリ、平成13年には地元有志10名により「求町の石橋を守る会」（以下「守る会」）が結成された。守る会は地元住民175名の署名をもって圃場整備組合長に橋の保存を要望し、また日田市長あてには石橋の保存と石橋群としての文化財指定を求める請願書が提出された。

この請願を受けて市文化課では緊急に文化財調査委員会を開催（平成13年9月26日）し、様々な意見が交わされた中、文化財調査委員会としては①名里橋は文化財指定の要素は充分であるが現段階では困難。しかし将来的には残す価値がある、②石橋の保存のために市道の路線変更ではなく移設等の考えが可能かどうか市で検討してほしい、との結論に至った。また市としては、圃場確保・治水・財政上の問題が多いため保存は不可能であると回答した（平成13年10月4日付）。

これに対し、守る会からは行政に対する目立った行動はないが、石橋群を地域の資源と位置づけ、説明板の設置や橋の清掃、稚魚の放流、親子向けの見学会、ホテル鑑賞会などの活動を繰り広げた。

平成14年度に入って、土木課長より石橋の移設等について問合せがあり、文化課としては、未指定ながら文化財としての橋の解体および復元が可能なレベルでの施工を望むとの方針を定め、これを踏まえた記録保存の仕様書を作成して土木課および解体・図化業者と協議を行い、平成15年8月より作業開始となった。

3. 作業の方法

記録の作成にあたり、次の作業を行った（図化業務報告書より抜粋、加筆改変）。

【作業1】除草および清掃…人力による除草作業後、石材の形状を確認するため低圧洗浄機を用いて洗浄し、目地と石材に付着したモルタルは槌とハンマーで目地が確認できる程度まではつる。

【作業2】標識設置…測量の目印となる標識を、上下流側面および橋の上面と輪石下面に設置。

【作業3】測量…作業2で設置した標識測量（公共座標）を行う。また標高設置のため水準測量も行う。

【作業4】写真測量…デジタルカメラ（有効画素数500万画素）で写真撮影（垂直撮影は高所作業車使用）。

【作業5】粗図作成…解体時にナンバリングまたは解体中に発見された技法調査の書き込み用として、解体作業開始前に平面図・立面図・輪石内部図を作成。

また解体作業時にあたっては、特殊な技法などの有無を確認する。

【作業6】図化…測量成果簿とデジタルカメラ撮影資料を基に画像処理と編集ののち、図化作業を行う。

4. 所見

図化・解体作業時に得られた所見は次のとおりである（図化業務報告書より抜粋、加筆改変）。

（i）全体状況

- ・石橋縦断勾配は右岸側に1.8%程度下がっており、その右岸側には石橋補強のための護岸がある。
- ・石橋の補強材としてコンクリートが使用され、輪石及び壁石の目地にモルタルが滲んでいる。
- ・路面幅員4.00～4.16m、輪石基礎部幅員4.30～4.34m。上部からの加圧により下部の幅員が広がっている。

（ii）輪石状態

- ・輪石の形状寸法は半径2.35m・弧長6.45m、輪石基礎部の幅員4.30～4.34m。
- ・輪石の基礎石は概ね水平である。

（iii）壁石状態

- ・上載荷重の増加の影響と考えられる亀裂が上下流側の石材に見られる。

なお解体作業に伴い、橋の内部などに規則的な石材の配列や特殊な技法などが見られた場合は協議のうえ記録を行うこととしていたが、橋の内部は礫や土砂で充填されており、特に変わった点は見られなかった。また橋面はアスファルト舗装されていたが、その下に敷石等は見られず、築造当初の橋面状態は不明である。

5. まとめにかえて

解体前の名里橋は、路面長約8.6m、路面幅約4.0m、環厚約35cmを測る単一アーチ橋で、欄干柱石は残るもののその間は無機質な鉄パイプで繋かれ、また橋側面には金属製の水道管が取り付けられ、路面は自動車の通行に耐えうるためにアスファルト舗装が施されるなど、現代の生活に合うように改変されたものであった。架橋年代については大正14年とも昭和6年とも昭和13年ともいわれるが、地元で聞いたところでは、「市道になる以前に、地元求来里の土木技術者であった日野秋義により橋がつくられ、氏の年齢から考えれば昭和13年ごろが妥当であろう」とのことである。図化・解体作業ではこれらの決定打となるような事象は確認できなかったが、近隣には氏がつくったといわれる先釣橋（天瀬町馬原）や大石橋（月出町/ともに橋長約7.0m、昭和27年架橋）が存在し、規模や技法の類似性から推察すれば、名里橋も昭和10～20年代ごろの氏の手によるものとして差し支えないであろう。本来ならば橋本体とともに護岸や河床などの構造や架橋年代等についての調査も行うべきであったが、担当者の橋についての知識が浅く至らなかった点が多いことを、この場を借りてお詫びする。

この名里橋をはじめとして、求来里地区には他にも、出店橋やゴクナシ橋（明治15年以前架橋）といった石造桁橋が存在しており、旧佐賀街道の景観を今に伝えるものである。さらに橋以外でも中世の板碑や宝篋印塔などが点在し、古いものから新しいものまで求来里河流域は石遺物が多在する地域であることから、地元では「石工の里」として地域の振興を図っているところである。

市民団体の活動によりその保存と開発の是非が問われることとなった名里橋は、結果的には解体され、現在は同じ場所に新しい橋が架かっている。農地の確保や水利の面からやむを得ないことであったが、地域に眠る文化

や資源を見直すきっかけになったともいえる。各種開発や防災のため全国的に石橋が消えゆくなかで、関係各方面のご協力により、落橋前に石橋の姿を公的に記録できたことの意義は大きく、保管中の石材とともに、地元の手でこの成果が何らかのかたちで活用されれば幸いである。

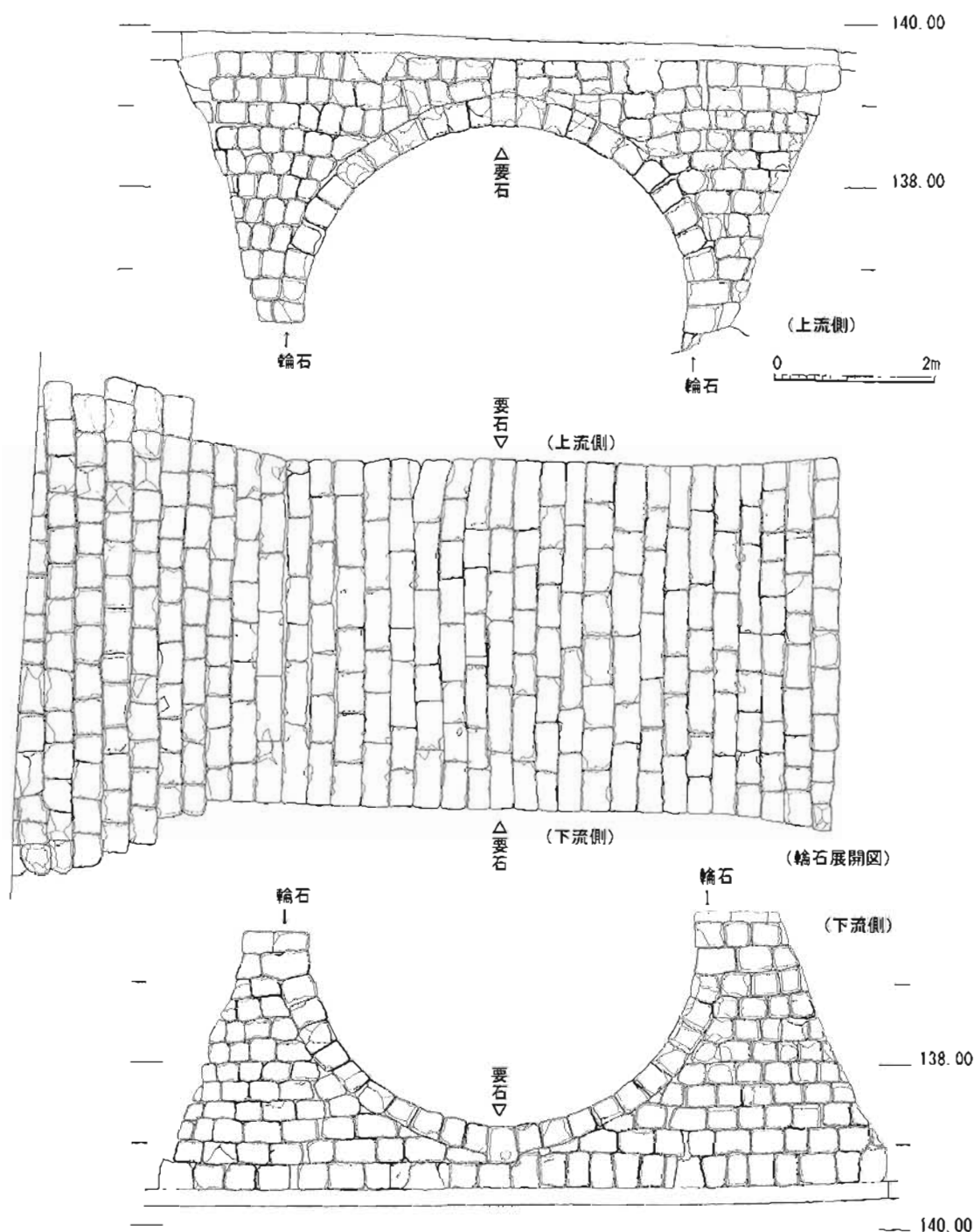
《参考文献》八尋隆道「日田・玖珠地域に現存する江戸・明治・大正期の構造技術―石造アーチ橋―」

『日田・玖珠地域―自然・社会・教育―』 大分大学教育学部 1992

岡本文雄ほか『伝えたい ふるさとの石橋』 高山総合工業株式会社 1996

『おおいたの石橋』 大分の石橋を研究する会 2000

ほか



第22図 名里橋側面・輪石展開図 (1/80)



着工前（上流側）



清掃後（上流側）



着工前（下流側）



清掃後（下流側）



着工前（輪石部）



清掃後（輪石部）



ナンバリング状況



解体後の石材保管状況